「私はさみしかった」

藤野可織

秋になると私はさみしかった。しかしそれも、小学生だったころの話だ。私は高校生になったばかりだった。もう秋になっても、特にさみしくはなかった。もしさみしくなったとしても秋のせいじゃなくて、それはいつの季節にでも起こりうる、誰にでも起こりうる、ただのありきたりのさみしさでしかなかった。そしてそんなさみしさでは、私がどういう人間かを証明することはできないのだ。ましてや、じきに夏だった。

「新緑の季節じゃなくなったからほっとする」と、カネコフが言った。

カネコフというのは、高校に上がって同じクラスになった私たちがつけたあだ名だった。四月の寒い日、たしかにあの日は寒かったけれど、カネコフの寒がりようはふつうじゃなかった。人よりちょっと背丈が低くて、人よりちょっとぽっちゃりした体を自分で抱きしめ、カネコフはくちびるを紫色にして寒い寒いと言っていた。そのうちに、カネコフはロッカーから真新しいあずき色のジャージを出してきて制服のスカートの下に履いた。ジャージの上も着ようとしたけど、ブレザーの上からじゃ袖を通すのも難しくて、肩に引っ掛けておくしかなかった。私たちは笑ったが、カネコフはまだ寒いみたいだった。

そこで、女の子たちがばたばたとロッカーへ走って行き、それぞれの真新しいジャージを手にして戻ってきた。ジャージのズボンが、カネコフの縮こまっ

た首にマフラーみたいにぐるっと巻かれた。腹巻みたいにお腹に巻きつけた子もいたし、単に肩や膝にどんどん重ねて載せてやる子もいた。男の子たちは半笑いになって、遠巻きにそれを見ていた。最後に、誰かのふっくらした手がうしろからやさしげにカネコフの髪を、分け目からそっとなぞって耳にかけ、きっちり眉の上で、ズボンを丁寧に頭に巻いた。特大サイズのヘアクリップが差し出され、それが手から手へと渡って、その即席の帽子がほどけないよう留められた。

そのせいで、金子さんだったのがカネコフになった。「ロシア人みたいだから」というのが理由だった。

「逆じゃないの？　ロシア人だったら寒さに強いからこんな恰好しなくていいんじゃないの？」カネコフはジャージに埋もれながら抵抗を試みたが、無駄だった。

それでも、カネコフはみんなのジャージを振り払おうとはしなかった。むしろたくさんのジャージに埋もれて安心したみたいで、急に顔色が良くなって、その日はそのまま授業を受けた。教室の真ん中で、あずき色のジャージの山が、猫背になってノートを取っていた。先生は、これがいじめでないかどうかをカネコフ本人に何度も確認し、ちがうとわかるといつもよりリラックスした調子で授業を進めた。カネコフは、ときどきゆるんできたヘアクリップを自分で留め直していた。あたたかなくすくす笑いが漏れた。カネコフがうまくクリップを留め直せないでいると、必ず助けの手が伸びた。クリップは銀色で、カネコフが頭を動かすたびにチカチカと救難信号のように光った。カネコフの肩や膝からジャージがずり落ちそうになるのを、私たちがそのままにしておくことは

なかった。近くの席の者か、ちょっと離れた席の者でさえ、中腰になってささっと机と机のあいだをすり抜け、カネコフの身なりを手早く整えては去って行った。

ヘアクリップを差し出したのは私だったが、昼休みにお弁当を食べるとき、カネコフは私のグループとはちがうグループにいた。

でも、この日、たまたまお互い一人きり、帰り道で前後に歩いていて、私がちょっと振り返って目が合って、なんとなく横並びになったとき、カネコフは私に自分がどういう人間かを知ってもらおうとしていた。私の通学用のボストンバッグの外側のポケットには、いつものようにあのヘアクリップが挟んであった。肘のうしろに位置していたあれが、カネコフになにかの合図をしたのかもしれない。

「なんでほっとすんの？」私はカネコフのこめかみをちらっと見ながら尋ねた。

「新緑、嫌いだから」とカネコフが答えた。

「なんで？」私は、新緑は好きでも嫌いでもなかった。それはそこにあるもので、好きになったり嫌ったりする対象ではなかった。そもそも、カネコフが新緑と口にするその瞬間まで、私は新緑を新緑と認識したこともなかった。

「新緑ってすごい色してない？」

「わかんない」

「蛍光色みたいなすごい色」

「そうかも」

「そんなすごい葉っぱがさあ、硬い枝を突き破って内側からぶわっと出てきてるんだよ」

「あー」と私は言った。わかったのではなくて、ただの相槌だった。

「ほんと気持ち悪い」カネコフが吐き捨てた。「それに、痛そう」

街路樹が私たちの頭上に覆いかぶさるように繁っていた。膝くらいまである生垣が、木々の根元を隠していた。黒々とした、不潔で不吉な生垣だった。私たちはしばらく黙って歩いた。

「痛そうって？　なにが？」地下鉄の出入り口が迫ってくるのを見て、やっと私は言った。

「木。ていうか、枝。新緑が出てくるとき、木はきっと痛いよ」

「ええー」と私は言った。

私たちは階段を降りた。階段は幅が広く、私たちの前にも後にも、私たちと同じ高校の生徒がいた。そうじゃない人たちもいた。一組は親子連れで、端っこで私の腰くらいの背丈もない子どもがうつむいて階段を一歩一歩降りるのを、母親が一段下から見守っていた。子どもが一段飛び降りると、母親も一段降りた。私とカネコフはその二人を追い越した。階段が終わり、踊り場で角を曲がると、振り返っても外は見えなくなった。外の光も入らなくなった。照明があるから、暗くはなかった。目の前には、私たちが歩くべき均一な光で満たされた長い通路があり、また階段があった。壁は白いタイル貼りで、床は灰色のタイル貼りだった。私は何かを思い出そうとしていたが、自分が何かを思い出そうとしていることさえわかっていなかった。

強い風が吹き上げていた。私とカネコフは、眉をしかめ、目を細めて、文句も言わず顔面を風に打たれるにまかせていた。地下鉄風だ。あそこはいつもとびきり凶暴なのが吹くのだ。きっと今も吹いてる。

「新緑って、なんか厚かましい」カネコフは憎々しげに言った。「油みたいにぎらぎらして、自分たち生きてますって感じで。なんでそうまでしてフレッシュなのを主張したいわけ？　そもそも、なんでそうまでして生きていたいわけ？」

私は笑った。地下鉄風が口に入らないように、口はできるだけ開けずに笑った。

「新緑ってエイリアンみたいじゃない？　内側から木を食い尽くして、食い破って出てくるの、ぶわっと」

「ぶわっと」ぶわっとってさっきも言った、という意味を込めて私は繰り返した。だがカネコフは気にしていなかった。

「そう、ぶわっと」力を込めてカネコフは何度でも言った。「なんか、すごく、ぶわっと」

「でも、新緑が出るから木って生きてんじゃないの？」

「ちがうちがう、別の生命体になるんだよ。元の木は死んで、新緑の姿をしたエイリアンに乗っ取られんの」

「えー」

「そんで、今くらいになると、葉っぱの色も落ち着いてきて、やっとほっとするんだよね。まあすんだことだし、もうしょうがないじゃん？　って」

「ふーん」

「それなのに次の年になると、また新しいエイリアンが内側からぶわっとやってきて、前のエイリアンを殺す」

「へんなの」と私は言った。

私は上の空だった。私はちょっといらいらしていた。何かを思い出そうとし

て思い出せなくていらいらしていることを、私はわかっていなかった。私が思い出せないことすら思い出せないのは、私がかつて秋にさみしくなる小学生だった、ということだった。私は、私にだって、そういう感受性の強い、傷つきやすい一面があるのだ。私は分かち合うためではなく、対抗するためにその話をしたかった。だから、きっと思い出せなくてよかったのだろう。

私たちは改札を抜け、また風にあおられながら階段を軽やかに下り、いくつものドアを開けっ放しにして停車している地下鉄に乗り込んだ。そこが始発駅で、車内のどのロングシートにも必ず一人か二人が座っていたが、まだまだ座るスペースはたくさん残されていた。私たちは二、三両を歩いて通り過ぎてから座った。

「私さ、痴漢に遭うんだ、毎日」とカネコフが楽しげに言った。

「えっ？」私は聞き返した。「毎日？」

「そう、高校入ってすぐのときから、毎日」カネコフはにやにやしていた。

「毎日？」

「うそじゃないよ、本当だよ、もう最悪」

私はカネコフの眉毛をまじまじと見た。目尻の上あたりはぼさぼさしていて、特に一本、流れを無視してぴょんと跳ね上がっている毛があった。

「地下鉄降りたあとＪＲに乗り換えなんだけど、ＪＲいつも混んでて、そこに痴漢がいるんだよ。朝は絶対いるし、帰りもけっこういる」

「えー、お尻触られんの？」

「うん」

「それってさあ、毎日ってことはさあ、おんなじ人なの？」

「わかんない、うしろにいるから顔わかんないし」
「なにそれ気持ち悪い。痴漢ですって叫べば？」
「うん……」カネコフはもうにやにやしていなかった。無表情になっていた。
私はカネコフの膝に目を移した。その隣に、お揃いの制服のスカートからぬっと出た私の膝が並んでいた。カネコフの膝はそれなりにきちんと合わさっていたが、私は浅めに腰掛けていたので、脚がややだらしなく開いていた。私の太ももは白くて肌理（きめ）が細かく、内ももにかかる影さえもはかなくすべらかだった。それに、私の太ももの方が、カネコフの座席に押し付けられて横にべちゃっと潰れた太ももよりも明らかに細かった。私は合点がいかなかった。痴漢に遭うということは、その肉体がまぶしく美しいということを意味するはずだ。私はまだ、痴漢に遭ったことがなかった。遭いたいわけではないが、私の太ももよりカネコフの太ももの方が価値が高いとは到底思えなかった。
私はそれを言う代わりに、「気持ち悪いっていえばさあ」と話題を変えた。「うちのマンション、ちょっと前に、ホモの人が引っ越してきたんだよ」
「うそ、え、本当に？　なんでわかるの？」カネコフがぱっと顔を明るくして私を見た。
「だっていっつも二人でいるし、くっついて歩いてんの」私はお尻をすべらせてカネコフのブレザーの二の腕に自分のブレザーの二の腕をくっつけた。「こんなふうに」
「えーっ、じゃあ本当にそうなんだ」
「しかもね、服が変なんだよ。二人ともおじさんなんだけど、いっつもお揃いの変な服着てんの。変な茶色のスーツと、変な茶色の暑苦しい帽子。頭んとこ

が丸くて、こう、ぐるっとつばがついてるやつ」

「へえー」カネコフは興味深げにうなった。

カネコフより、私の降りる駅が先だった。地下鉄の車内は、乗り込んだ時点よりもずいぶん混んできていた。シートは完全に埋まっていて、私たちの前には人が立っていた。

「じゃね」私は立とうとした。「痴漢に気をつけて」

「さっき言うの忘れてたんだけど」カネコフが小声で言った。「ホモじゃなくて、ゲイだよ」

「なんかちがうの？」

「わかんないけど」カネコフは首をかしげた。

私は立ち上がり、体を横にして前に立つ人と人のあいだをすり抜けながら、カネコフに小さく手を振った。カネコフも同じように、小さく両手を振っていた。

マンションの前で、私はそのゲイの二人に行き合った。彼らは私と入れ違いにマンションから出て、どこかへ行くところだった。

「こんにちは」私は軽く目を伏せ、軽く会釈をした。それは、他の住人にやるのとまったく同じ挨拶だった。けれど二人は、まるで私がいないかのような態度で行ってしまった。

それは、もうすでに何度か経験していたことだったので、私は今更驚きもしなかったし落胆もしなかった。あの二人とはエントランスやエレベーターを出たところの共用廊下でしばしば行き合うが、私が挨拶をしても絶対に挨拶を返さないのだ。それどころか、私を見もしない。

私はエントランスを歩きながら首をひねって彼らの遠ざかって行く後ろ姿を眺めた。二人とも成人男性にしては背が低くて、たぶん私とそんなに変わらないくらいだった。おまけに小太りで、その太り方までそっくり同じだった。彼らはいつもどおりお揃いの変な茶色のスーツを着ていて、変なフェルトっぽい素材の帽子をかぶり、二の腕と二の腕をぴったりくっつけていた。顔はよく見たことがなかったが、体型を見ると双子としか思えなかった。でも、双子は別にくっついて歩いたりはしない。

やっぱホモだよなあ、と私は思った ホモに蔑称の意味合いが含まれると知ったのは、だいぶあとになってからだった。

初夏に、ゲイの二人の服装が変わった。変な生成りのぺらっとしたスーツに、変な生成りのぺらっとした帽子になった。母が、あれは麻だと教えてくれた。それから、あの二人が母には挨拶を返すことも明らかになった。濡れた髪を拭きながらエアコンの真下に仁王立ちになり、冷風を全身で受けようとしている晩のことだった。

「えーっ」私は大声を上げた。「うっそマジ？　なんで？」

「え？」母も不審げだった。「ほんとに？　ほんとにあんたには挨拶しないの？あんたは？　ちゃんとしてる？」

「してるよ！」

母は、彼らの挨拶のやり方を教えてくれた。

「あの二人の挨拶はねえ、こうやって帽子のつばをちょっと摘んで」母がこめかみのあたりに指をやった。「にっこりして会釈」

「げーなにそれ。キモい」

「キモくありません。イギリス紳士みたいですてきじゃない？」

私は母に、彼らの挨拶が動作だけだったのか、何らかの言葉がついていたのかを聞き損ねた。いや、もしかしたらあのとき私は尋ね、答えを聞いたのかもしれない。でも、思い出せない。私は彼らの声を知らず、彼らが私と同じ言語で話すさまをうまく想像することもできない。

思い出せないことはもう一つあって、それは、私がいつ、彼らにどうしても挨拶させると決意したかだ。私だけが挨拶を返されないと知ったこのときだったか、はじめて恋人ができて、以前から思っていたとおりやっぱり私の肉体には価値があるのだということをぞんぶんに確認できたときだったか、カネコフに痴漢したときだったか。それとも、彼らに挨拶をさせるために私が行動を起こしたまさにそのときだったのかも。

私はもう、これらがどの順番で起こったのかも忘れてしまった。挨拶させようという試みが最後だったのはたしかだ。全部が同じ夏に起こったということも。そして私は、かつて私だった古いエイリアンを殺して私になりかわった新しいエイリアンだった。

カネコフとは、お弁当を食べるグループは相変わらず別だった。いっしょに帰った日以来、少しは互いに親しみを感じるようになってはいたと思うが、私に恋人ができるともうカネコフのことは眼中になかった。私は私と同じように、恋人がいる子たちとつるんでいた。そのころには、カネコフが毎日痴漢に遭うというのはけっこう有名な話だった。カネコフが自分で、誰彼かまわず愚痴を言うようになっていたからだ。

「毎日だって。ちょっと大袈裟だよねえ」というのが、おおかたの意見だった。カネコフは同情されてはいたが、同時にやや疎ましがられてもいた。

「さあ。本人が毎日だって言うんなら毎日なんじゃないの」と私は私の仲間に言ったことがあったが、カネコフに味方したわけじゃなくて、どうでもよかったからだ。いや、どうでもよくはなかった。私は自分の肉体の持つまぶしさと美しさしか見たくなかった。それだけを堪能したいのに、カネコフの痴漢の話は邪魔だった。私はカネコフを助けようとしたことはなかった。それどころか彼女が助けを求めていたことにも気がついてはいなかった。

だから、カネコフに痴漢をしたのは、ただ単に、ふざけただけだった。私の恋人は他校の高校生で、その朝、私はいつもより一時間ほど早く家を出て、登校前に彼の家の近くの駅まで出向き、会って少し話してから、上機嫌で自分の学校へ向かっているところだった。前の日にファストフード店で二人で宿題かなにかをやっていて、私がまちがえて彼のノートを持って帰ってしまったので、それを返しに行ったのだったと思う。たぶん、そのノートはそんなに急いで返さなくてもよかった。私は返しに行くということをやってみたかったのだ。恋人のために早く起きて、他のふつうの日にはしないことをしたかったのだ。それができて、私はきっと有頂天だった。私は、車内にカネコフの黒光りする頭を見かけるまで、自分の乗っているぎゅうぎゅう詰めのＪＲが、彼女の行き帰りのルートであることも、彼女が痴漢に遭うと主張している現場であることもすっかり忘れていた。

肺いっぱいに吸い込んでいた朝特有の清潔な空気は、いつのまにかのどに少し名残があるだけになっていた。吊り革に両手で捕まり、爪先立って伸び上が

ると、すぐそこの乗車口近くの乗客のあいだに、暗い穴があった。それが、私に背を向けて、うなだれているカネコフの姿だった。彼女の肩を隠すように左右に立っている乗客は、どちらも男性だった。私はさらに伸び上がってよく見ようとしたが、彼らがカネコフに痴漢を働いているのかどうかはわからなかった。

私は吊り革を離し、横歩きでカネコフに近づいた。くっつきあって壁になっている乗客たちの継ぎ目を肩でこじ開けて進む。舌打ちが聞こえたが、怖くもなんともなかった。他人のスーツのジャケットやブラウス越しの熱い霧が、私の頬に押し寄せてくるようだった。私は平気だった。私は、左肩を先頭にして、乳房や尻で乗客たちの分厚い体をはねのけ、じりじりとカネコフの背後に迫った。

カネコフがうなだれているせいで持ち上がった後頭部が、私のすぐ目の前にあった。本当はカネコフに重なるように真後ろに立ちたかったが、姿勢を変えるのは難しかった。私は横歩きしてそこまでやってきた姿勢のまま、左手をパーのかたちに広げて、当たりをつけてカネコフの制服のお尻を触った。熱くて埃っぽい制服の布地の感触があった。だが、私の手は彼女の尻に沿わなかった。尻というのが丸いということを、私はまるで知らないみたいだった。私は指をいっぱいに伸ばしていて、手の形としてはむしろ反り返っていた。だから、尻のあたりの布地に触れているのは、指の付け根のラインくらいのものだった。私は新鮮な驚きに打たれながら、そっと指の力を抜いた。それでやっと指が尻に落ち着き、私は左手全部で尻を触ることに成功した。

私はそのまま、カネコフの耳にこう吹き込むつもりだった。

「あれ？　毎日痴漢に遭ってるんじゃなかったっけ？」

私は、カネコフが嘘をついていると断罪する気はなかった。カネコフが痴漢に遭っていることを否定する気もなかった。私には悪気なんてなかった。ふざけていただけなのだ。でもそれを言えば、カネコフはそうは受け取らなかっただろう。それにそもそも、私が触る直前まで彼女が別の痴漢の被害を受けていなかったとは言えない。

私が口を開く前に、カネコフが動いた。カネコフは強い力で、周りの乗客たちを摩擦しながら振り返った。カネコフは涙ぐんだ目で私を睨み上げ、けれど口元は笑っていた。カネコフが私の名前を親しげに呼び、自分たちや他の乗客の体に押されて見えない位置で、さっき彼女の尻を触った私の左手をぎゅっと握った。

私たちはそのまま、ＪＲを降りるまで手をつないでいた。地下鉄に乗り換える途中で、カネコフは「ありがとう」と言った。

「え？　なにが？　なんで？　私、痴漢したのに」私はおどけて答えた。

「痴漢？　あれが？」カネコフは声を立てて笑い出した。

「なに？　お尻触ったでしょ、私」

「あんなの痴漢じゃないよ。私、すぐわかったもん」カネコフは笑いすぎて苦しそうだった。

「痴漢の触り方って、あんなんじゃないんだよ。揉むの」

「揉む」

「そう、揉むの」カネコフが片手を胸の高さに上げ、宙に向かって指をざわざわと不気味に動かした。

それからすぐに、あの濃い尿のなかをあえぎ泳いでるみたいな夕方がやって来た。マンションに帰り着いた私の前を、例のゲイの人が歩いていた。一人だった。二人いっしょじゃないところを見たのははじめてだった。

一人でも、彼は変な生成りのぺらっとしたスーツに、変な生成りのぺらっとした帽子をかぶっていた。彼がちらりとこちらをうかがって足を早めたのがわかった。私も足を早め、彼との距離を縮めた。彼が郵便受けをチェックしなかったので、私もしなかった。彼は傍目にも慌てているとわかる動作でオートロックの暗証番号を押し、自動ドアを開けた。その向こうは照明が消えていて暗かった。夜にならないと点かないようになっているのだ。暗い廊下のまっすぐ先にエレベーターがあった。ひとつしかないそのエレベーターの箱は一階に降りてきていて、やけに黄色い照明を灯してぽつんと私たちを待っているのが見えた。彼はほとんど小走りになっていた。私には彼の考えていることがわかった。彼は、私とエレベーターに乗り合わせるのを恐れているのだ。

逃がすものかと思ったし、逃がす距離でもなかった。彼がエレベーターのボタンを忙(せわ)しげに叩き、ドアが開いた。彼はさっと中に滑り込むと、こちらに向き直って階数ボタンを押した。ゆっくりとドアが閉まっていく。が、そのドアの動きの緩慢さを、私は知り尽くしていた。半分も閉じないうちに、私は右手でドアを受けた。安全装置が働いて、ドアがずるずると開いた。

「こんにちは」私は軽く目を伏せ、軽く会釈をした。彼はすでにめいっぱい後ずさり、階数ボタンと対角に位置する角にその小太りの体をぎゅっと押し込んでこちらをうかがっていた。

三人も入れば狭苦しく感じる、小さなエレベーターだった。私は悠々と乗り

込み、階数ボタンを押した。先に押されていたのが七階で、私は十二階だった。ドアが閉まった。暗い共用廊下の向こうに、四角く外が見えていた。まだ尿のように輝いていた。箱が上昇をはじめ、粗いコンクリートの内壁が輝く外界を押しつぶした。

私は体ごとゆっくりと彼に向き直った。あからさまに、彼は身を強張らせた。私は彼を頭の上から爪先まで見回した。なのに、顔はどうしても思い出せない。思い出せるのは、鼻の頭にびっしりと汗をかいていたことと、彼がどうあっても私と目を合わせようとしなかったことくらいだ。しかしこれは、私も同じだった。私も鼻の頭に汗をかいていたし、それどころじゃなく全身に汗をかいていた。私は高校で、生理がはじまったのかもしれないとトイレに確認しに行ったが、下着を濡らしているのは汗だった。また、私も彼と目を合わせることはしなかった。目を合わせずに、彼の姿をじっくりと見ていた。彼は、どう見ても怯えていた。

私は不思議でならなかった。私の肉体は、恋人が喜んでいるように人を喜ばせるか、あるいはカネコフを痴漢する男たちが喜んでいるように人を喜ばせるか、どちらかだけであるはずだった。それに、彼と私だったら、こんなふうに上から下まで見られるのは私のほうだし、怯えるのも私のほうなのがふつうだ。彼がゲイであるということを差し引いても、関心がないというならともかく、怯えられるのは心外だった。

一歩前に出ると、もうそれだけで、私の体はエレベーターの箱の中心にあった。腕を前にやれば、角に背中を押し付けてすくみあがっている中年男に触れられる距離だった。

「こんにちは」私はもう一度言った。返事はなかった。彼は口元を両手で覆っていた。私は、彼が小刻みに震えているのに気づいた。

震えている！　この男は、私に近づかれて、声も上げられずに怯えて震えている。

そのとき、私の全身にじんわりと広がったのはたしかに喜びだった。それは、それまでに味わったことのない種類の喜びで、尿に経血がひとすじひらめくように怒りが混じっていた。この男は、この私を受け入れないつもりなのだ。こんなつまらない外見をしたつまらない男のくせに。私は歓喜し、激怒していた。

私は汗の冷えた太ももを、もう一歩踏み出した。男の顔もわからないくせに、彼が涙目になっていたのはしっかりとおぼえている。

「こ、ん、に、ち、は」私は笑みを含んだ声で言った。

男が、私のうしろに目をやった。エレベーターががたんと止まり、うしろでドアが開いた。七階だった。

男が出られないように、私はさっと足を肩幅に広げた。ドアが閉まった。男が泣き出した。きゅうと閉じられた目元から、涙が噴き出すのを私は見た。男はそれでも声を上げないよう顔をくしゃくしゃにしてこらえ、そのせいで痙攣をはじめていた。

エレベーターが上昇していくのとうらはらに、男は崩れ落ちつつあった。私は座り込んでいく男の、そのきちんと揃えられた膝をまたぐように立って、彼の生成りの帽子を見下ろした。制服のスカートが、つばに触れていた。ふつうだと、これがうれしいはずなのに。私は男をさげすんだ。泣くほど怖いんだ。へんなの。

十二階に着いたのと、男が漏らした尿が足もとにじりじりと押し寄せてきたのは、ほぼ同時だった。

「うっわ、きたない」私は小声で吐き捨て、身をひるがえしてエレベーターから降りた。

小学生だったころ、秋になると、私はさみしかった。上下に弾む赤と黒のランドセル、他校から転校してきた子のナイロン製の黄色のランドセル、空は灰色で、道もコンクリートで灰色だった。パンツの履き口がずれて、お尻の割れ目に食い込んで、私はスカートの生地ごとそこをつかんでちょうどいい位置に戻そうとした。一度は戻ったかに思えた。だけど、すぐにまたずれた。目に見える空も道も平坦で、奥行きがないのに続いていた。続いていると知っていた。空の上には宇宙があるし、道はいつかどこかで途切れても、その先には何にもなくなるんじゃなくて土地や海がある。とても信じられないことだったが、そうだと知っていた。続いていると思うだけでさみしくてたまらない日が、秋には必ずあった。ほかの季節には、そう思ってもさみしくなんかなかった。それとも、思いもしなかったのかもしれない。銀杏の黄色はくすんで汚れていて、ちっともきれいではなかった。私はがっくりと頭をのけぞらせてスキップをしてみた。そうやって跳ねると、空に向かってまっさかさまに落ちてしまいそうだった。それでもかまわなかった。それなのにそうはならなくて、そのことが私をいっそうさみしくさせた。

夜の電車のボックス席の窓際に座り、つめたい車窓にこめかみをつけて、私

はあの夏のこととと、それよりずっと遠い秋のことを思い出している。私は寝たふりをしている。さっきまでは、本当に眠っていた。隣から、控えめだが荒い息遣いが聞こえるので目をさましたのだ。

私はどうやらあの朝、幸運にもカネコフのちょっとした助けになったらしいが、そのあと彼女のために何かをしたおぼえはない。ゲイの二人はあれからすぐに引っ越してしまったらしく、二度とあの男の人も、パートナーの人の姿も見ることはなかった。私のやったことは明るみには出なかった。もっとも、彼が私を告発するなどとは私は夢にも思っていなかった。あのころの私なら、ただ挨拶してもらいたかっただけ、と言ってのけるだろう。ああ、それにしてもあの、体を突き破るような歓喜と激怒！

でも、私もかつては秋になるとさみしくてたまらなくなるような罪のない子どもだったのだ。どうか許してほしい、けれど、そんなことで私を許すのは私自身だけだと知っている。

私は、今、私の隣に座って息を荒げているのが一人のみすぼらしい老人だと知っている。目を覚ましたとき、私はなにかの予感に打たれて、頭を上げることをしなかった。それと気づかれないように、そっと目だけ動かして盗み見をした。なにもかもが、一目で了解できた。たぶん、この車両には私とこの人だけなのだろう。だからこそ、彼はわざわざ眠っている私の隣にやってきた。

服の中に中身が入っているのかどうかもあやしいくらいぺったんこに痩せた老人だった。毛羽立った袖口から覗く手首には灰色の血管が浮いている。しかしその手が握り、ひたむきにこする性器は、お湯から上がった赤ん坊みたいにきれいなピンク色をしている。

私はうつむいて、寝たふりをして、泣きそうになっている。この人もかつては、たとえば秋になるとそれだけでさみしくなるような、あるいは新緑を嫌うような子どもで、そのことを言い訳に私に対してすまないと、許してほしいとあとで願うことがあるのだろうか、と考えている。

でも実際のところ、私を動けなくさせているのは圧倒的に恐怖だ。私はこの老人に勝てるだろうか。おそらくは勝てるだろう。私は重いブーツを履いている。けれど、本当にそうだろうか？　もし私の読みが甘かったら、この老人が見た目よりも力があったら？

私は顔を上げないまま、とつぜん肩から立ち上がる。通路への道を、老人のへなへなしたズボンとピンク色の性器が阻んでいる。私は緑色をしたシートにブーツのまま乗り上がり、老人を飛び越して通路に降りる。老人の怒り狂った捻(うな)り声が聞こえる。悲鳴かもしれない。悲鳴だといい。足がうまく上がらなくて、彼の性器を蹴ったかもしれない。私は振り返らない。思ったとおりこの車両には誰もいない。私も悲鳴を上げたいが、それどころではなくて、私は必死に車両を区切るドアを開ける。老人のうめき声が聞こえている。彼が追いかけてきているのかうずくまっているのかわからない。次の車両には少し人がいるが、みんな眠っているようだ。私は駆け抜ける。私は恐ろしくて恐ろしくて、さみしくてたまらない。車両をいくつか駆け抜けた先はもうどこにも行くところがないと知っていて、それがさみしくてたまらない。私はこんなものはいらなかった。振り払って振り払って、ブーツの底で踏み潰してしまわなければ。私はこんなものはいらなかった、こんなさみしさは。だってこんなさみしさでは、私がどういう人間かを証明することはできないのだ。